～ 抄　録 ～

〔論　説〕

「NOK ドリル」の開発とその完成見取り図

川　口　顯　弘

本稿は私が開発した仏検対策用教材「仏検ドリル」と，その後身「NOK ドリル」について，その開発の経緯と問題点について述べたものである。「仏検ドリル」は十数年にわたる改良の結果，フランス語の未習者を対象に，僅か 2 ～ 3 ヶ月の学習期間で仏検 4 級の合格率100%，3 級80%以上という画期的な成果を収めた。しかし私の実験授業の対象は，熾烈な競争試験に勝ち抜いてきた学生たちであり，いかなる猛勉強にも耐えうるエリートばかりであった。

そこで私は，次に「意欲なき学生群」を対象とする新教材の開発を模索し始めた。即ちそれが「NOK ドリル」である。

「仏検ドリル」と「NOK ドリル」は，外見上は双子の兄弟のように酷似しているが，その対象学生はまるで正反対である。そこにはいかなる問題があるのか，その矛盾はいかにしてクリアされるべきか。前稿以来，私が問題としたものは一貫してそこにあった。

本稿は「NOK ドリル」の完成実物の紹介とともに，その制作過程をつまびらかに描いた一種の報告書であり，その僅かな栄光と，果てしなき挫折の物語である。

リルケとロダン

田　中　香　澄

ドイツの詩人リルケの50年余の生涯のなかで彼の優れた詩の世界の解明にあたって，当時の多くの優れた精神の持ち主たちとの彼独特の心豊かな出会いと西の世界の各地の特色ある自然や町々との出会いの数々が絶えず重要な核心を形成し，その詩的精神の展開を極めて多彩なものにしていることを抜きにしては何事も語れない。その中でもフランスの彫刻家ロダンとの出会いと豊かな心の交流はリルケの“事物詩”という概念を理解するためには避けて通れないものである。この研究はリルケの「ロダン論」の一端に触れながら，今後のリルケ研究の第一段階としてまとめたものである。最終的にはリルケの最高にして最後の作品「ドゥイノの悲歌」の豊かな解明へ向けて，各局面における

リルケと人々や町々との出会いを克明に追いながらリルケの詩の本質の今後の研究を推し進めてゆきたい。

The Patterns of Use of Foregrounded Hybrid Gerunds in the *It*-Cleft Construction

YAMAZAKI, Satoshi

This paper tries to understand the patterns of use of foregrounded hybrid gerunds in the *it*-cleft construction based on data obtained from the Bank of English corpus and with Google Search. It is found that verbs entering into negative hybrid gerunds are almost limited to *know*, that is, the pattern of *it's the not knowing that....* The expression is usually used as it is without complements of *knowing*, probably being a semi-fixed expression. It is then pointed out that the intransitive use is strongly preferred in foregrounded hybrid gerunds in general, and the reason for this, together with the reason for the rarity of negative hybrid gerunds is explored. It is also shown that the pattern of use of hybrid gerunds in *it*-clefts is quite different from that of the corresponding verbal gerunds.